

氏 名 お 尾 張 (石山) 睦
 学位(専攻分野) 博士 (人間・環境学)
 学位記番号 人 博 第 137 号
 学位授与の日付 平成 13 年 11 月 26 日
 学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
 研究科・専攻 人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
 学位論文題目 異郷の中の故郷
 ——ヴァルター・ベンヤミンにおける幼年時代の意味について——

(主 査)
 論文調査委員 教授 松 島 征 教授 道 旗 泰 三 助教授 田 中 雅 一
 教授 平 野 嘉 彦(東京大学)

論 文 内 容 の 要 旨

本学位申請論文は、ヴァルター・ベンヤミン（1892—1940）の著作ないし自伝的散文から、「幼年時代」ないし「子供」にかかわるテーマ群を抽出し、それをベンヤミンの思想の全体的文脈のなかに位置づけようとする試みである。

「序論」において、そうした問題設定のもつ意義が提示される。すなわち、ベンヤミンが「幼年時代」というテーマに執着した所以は、ドイツ系の同化ユダヤ人としてのみずからの出自にたいする個人史的かつ社会的、歴史的関心にあるという。そこに看取されるのは、ユダヤ神秘思想のカバラにも通ずる、断片、断章としての著述形式への偏愛であり、それにこめられたメシアニズム的な幸福の形象である。

第一章「書かれなかった青春」では、申請者は、ベンヤミンにおいて、幼年時代に先だって、青年時代がもっていた意味を明らかにしようとする。『ベルリン年代記』のなかで、彼は、かつてかかわっていた青年運動を回想しながら、観念性ゆえに第一次大戦の勃発とともに挫折した、その限界を見定めようとしているが、申請者は、この『ベルリン年代記』が未完のままに放棄されるなかから、新たに『1900年ごろのベルリンの幼年時代』が構想されたことに注目する。すなわち、「青春」について沈黙するとともに、幼年時代について語る言葉が成立したというのである。

第二章「王様と子供」は、第40回ドイツ語学文学振興会奨励賞を受賞した論文をもとにしたものであるが、ベンヤミンの主著『ドイツ悲劇の根源』を考察の対象にすえている。この著作は、「象徴 (Symbol)」に比して、従来、貶められてきた「寓意 (Allegorie)」を復権せしめる意図から、ドイツ・バロック悲劇における、その独自の機能をあらためて認識せしめたものとして、今日、すでに不動の評価を得ている。児童書の蒐集家でもあったベンヤミンは、玩具に関するエッセーのなかで、バロックの寓意の「細断的・分離的原理」が、近世の児童書のなかに流れこんでいることを指摘しているが、申請者も、ベンヤミンのえがきだすバロック悲劇に登場する王や陰謀家に、子供に特有の遊戯的、即興的な性格を認めている。

第三章「幸福と罪の間」は、『ベルリンの幼年時代』にもちいられる雪のモチーフをとりあえずの手がかりに、前章につづいて、子供の言葉遊びのテーマを扱っている。それは、大人の言語からの逸脱として、世界の秩序を攪乱するという意味では、ひとつの魔法、魔術ではある。しかし、それはまた、大人の世界の歪みを正す作用をおよぼすこともありうるだろう。いずれにせよ、そこに内在しているのは、子供をも呪縛する運命の影であるとともに、そこからの解放としての幸福の像にほかならない。

第四章「生き延びる書物」において、申請者は、ベンヤミンの論文「プルーストのイメージについて」をも援用しながら、『ベルリンの幼年時代』という作品の構造的な意味を検討しようとする。プルーストの長編小説『失われた時を求めて』が、細部への書きこみによって、膨大な分量にふくれあがったのに比して、『ベルリンの幼年時代』は、いよいよ緊密に凝縮されていく。亡命の途につく者の手荷物といった観のあるこの形式を、申請者は、回想の主観性に耽溺しないための予防措置として理解している。

第五章「『ユダヤ的側面』」において、まず申請者は、『ベルリンの幼年時代』にユダヤ的な性格を認めるべきか否かをめぐって、アドルノとショーレムのあいだに存在する見解の相違を紹介したうえで、その真の意味をさぐりだそうとする。そして、「具象的な事物から生気を奪い取り、かわりに抽象概念としての意味を次々に取り憑かせてゆく」、その文体を指摘しながら、あくまでも「意志的記憶」によって構成されているこの作品を、メシア的な未来をまっぴらしてはじめて完成されう、とりあえずは断片でしかないものと規定している。

第六章「モスクワ体験」は、紀行文と日記が一体となっている『モスクワ日記』をとりあげている。そこでは、「玩具博物館」を訪問したり、ロシアの玩具を買い集めたりするなかで、恋人でもあったロシア人の共産主義者アーシャ・ラツイスが没頭していた「プロレタリア子供劇場」に、ベンヤミンが関心をよせていく事情が語られる。それは、彼がブレヒトの「教材劇」を高く評価する契機となったという意味で、「バロック悲劇」に遡行する問題を提起するものとされる。

第七章「文字の幸福」で展開される論旨は、第三章を敷衍しつつ、全体を結論づけるものともなっている。バロック・アレグリーやブレヒトの「異化効果」とも結合しつつ、ブルースト的な「無意志的記憶」としてよみがえるのは、おそらくはすでに個を超えた歴史的な記憶であり、幸福の原像なのである。そして、申請者は、ふたたび『ベルリンの幼年時代』に眼をむけながら、「文字拾いの箱」の章のなかに、その証を読みとっている。

論文審査の結果の要旨

ヴァルター・ベンヤミンの著作は、狭義の文学作品のみならず、文芸学、哲学、社会学といった既成の枠組をも超えて、記号論、メディア論、都市論といった、きわめて広範な領域にまたがっている。したがって、それを論ずる立場にあっても、さまざまに多様なアプローチが可能となる。それは、換言すれば、いたずらに散漫に陥ることなく、議論を展開していくためには、テキストの読解を収斂させる一定の視点が要求されるということでもあるだろう。

本学位申請論文は、「論文内容の要旨」にもあるように、ベンヤミンにおける「幼年時代」ないし「子供」のテーマをとりあげて、論じたものである。これに関連した従前の研究は、大別すれば、①それが主要主題として表現されている『ベルリンの幼年時代』に関する個別的な解釈、②すでに若年において形をなしつつあった、ベンヤミンの教育思想についての論考、③ベンヤミンの玩具に関するエッセイについてのモノグラフィ、のおおよそ三つに分岐したままであり、それらを統一的にとらえる研究は、日本においてはいうまでもなく、ドイツ語圏にあっても、いまだ存在しなかった。若干、不十分な点は散見されるにしても、このテーマに関する総合的研究は、本論文をもってその嚆矢とする。その意義は、正当に評価されるべきであろう。

また、その着想のすぐれている点は、それによって、①まずはベンヤミンの個人史の事情を媒介としながらも、それを展開させて、ドイツ系ユダヤ人を取りまく歴史的、社会的状況へのパースペクティヴを切りひらいていること、②元来、そこに内在しているユダヤ的エートスの起源を遡りつつ、ベンヤミンの思考ないし著述形式に、ユダヤ神秘思想の痕跡を確認していること、③子供の思考に固有ともいいうる、断片的、即興的、遊戯的な性格に着目して、一見して二項対立とうけとられるところの、一方でドイツ・バロック悲劇に用いられている、恣意的、意図的な「寓意」と、他方で、シュルレアリスムにも通ずる、ブルーストの「無意志的記憶」とを、結びつける視点を獲得していること、④上記に関連して、ベンヤミンの希求する、メシアニズム的な幸福、救済の原像を予感せしめるのに成功していること、である。なかんずく、③に指摘した点が、従前のベンヤミン研究においては、十分に論じつくされていない憾みがあり、この論文が提示しうる貴重な知見であるということが出来る。

そもそもベンヤミンによる「寓意」の復権は、その恣意的、記号的な機能を再評価する、いわば逆説的な志向性を有するものであった。形象と意味とのあいだに、直接的、同一的な生きた結合が認められる、いわゆる「象徴」に比して、「死」が「分割線」を刻みつけるといふ、まさにその間接的、差別的、乖離的な構造によって、弁証法的な緊張を生みだしているのが、「寓意」の特性とされた。しかし、晩年の著作において、直接的、無媒介的なユートピア像への衝迫がうかがえるようになる。「恣意的 (willkürlich)」な志向から「無意志的 (unwillkürlich)」な想起への転回の、換言すれば、死物と化した形象から、ユートピアの予感を内在させた形象への転回の、そのモデルとなったのが、ブルーストであり、シュルレアリスムであった。ベンヤミンの思考のアポリアともいふべきこの契機を、「幼年時代」ないし「子供」というテーマを媒介項

に設定することによって、明らかにした本論文は、まさに記号論的な方法をとることによって、みるべき成果をあげている。まみられる論文構成上の不整合は、それに比べれば、小さな瑕疵というべきである。

本学位申請論文は、かくのごとく文化人類学講座文化記号論指導分野にふさわしい内容をそなえたものである。

よって本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成13年7月6日、論文内容とそれに関連した事項について試問をおこなった結果、合格と認めた。